日本語ボランティア参加者に日本ボランティア活動がもたらす影響と効果

金久保　紀子

要　旨

留学生センターにおいて導入している日本語ボランティア活動が、日本語ボランティア側にとってどのように影響を与えているのかについて、3つの事例研究を通して考察した。日本語ボランティアにとっては、日本語教師と日本語教育に関わる活動に関する具体的な情報を与える機会となっている事例、また、ボランティア自身が留学生に関わることを通して得られる経験に、生涯学習的な意味合いを持たせている事例を検討した。日本語教師養成にとっては、職業選択に当たっての重要な情報を与えるという意味でも日本語ボランティア活動が有益であることが確認でき、幅広い層の日本語ボランティアを確保することが、日本語クラスにも有効であることがわかった。

【キーワード】　日本語ボランティア　日本語教師養成　生涯学習

Influences and Effects of Japanese Language Volunteer Activities on Volunteers

KANAKUBO Noriko

【Abstract】This is a case study of Japanese language volunteer activities. Not from learners points of view, but from volunteer's view, 3 cases are studied. For volunteer, the activity gives very concrete information about Japanese classes and teachers. And a volunteer considers this activity as life long learning. It becomes clear that the activities are very effective and necessary for Japanese teacher training and recruiting volunteer from different age and background groups is important.

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは、日本語3（元：文型文法3）、文型文法4などのコースに、日本人学生を中心とした日本語ボランティアを導入してきた。会話を中心とした授業において、留学生との会話練習の相手として、またグループ練習のリーダー的な存在として、日本語ボランティアの存在は留学生の日本語学習意欲を喚起し、概ね好評である。

2年ほど前からは、web を利用して日本語ボランティアの登録を進めるなど、システム面での整備も行われ、大学院生も含め多分野の学生が日本語ボランティアとして参加している。筆者は平成10年から筑波女子大学（以下TWU [1]）において日本語教師養成コース [2] を担当している。教師養成を補強する活動となれば、という考えから、TWU の学生を、積極的にボランティアとして参加するよう指導してきた。

本稿では、日本語ボランティアの活動について、留学生への効果という観点ではなく、日本語ボランティアにとってはどのような効果、または意味合いがあるのか、という観点から考察する。日本語ボランティアの存在は、補講クラスに参加している留学生には疑いようもなくプラスとなっている [3]。では、日本語ボランティアに参加するということが、日本語ボランティア側にとってはどのようなプラスになっているのか、あるいはなっていないのか、どのような効果があるのか、をTWUの学生の事例を見るという方法で明らかにしたいと考える。

日本語教育関係者は、日本語学習者にどのような効果があるのか、という視点に偏る傾向があることは否めない。日本語ボランティアが「ボランティア」という名称を持つ以上、参加する側にとっても、何らかのメリットがなければ、日本語ボランティアを交えた活動を行っていこうという方針はやがて破綻する可能性もあるだろう。

したがって、日本語ボランティアにとっての日本語授業への参加の意義を確認しておく必要があると考える。

2. TWU学生の日本語ボランティア参加状況

TWUの学生は、1999年から2003年まで、表1のように参加している。参加条件は、最低「日本語教育概論」という授業を受講していることで、日本語教師養成コースを履修している学生がほとんどであった。

3年生を中心に、毎年数名が毎学期参加していた。延べ27名の内、5名が1年だけの参加であり、その他は2年以上継続してボランティアに参加した。もっとも長い学生は3年であった。学生によっては、複数のレベルの日本語クラスや、複数の曜日に参加していたが、その数は延べで4名程度であった。2002年には、日本語ボランティアとして韓国人留学生が参加した [4]。

ボランティア希望者には、まずポスターなどで知らせた後、TWU 学内で説明会を開き、そ

の後直接留学生センターに行って、他のボランティアと同様の活動に参加してもらった。

卒業生とあるのは、日本語教師養成コースを終了し、海外に教えに行く前の準備として、あるいは日本語学校の非常勤講師をしながら参加したケースを指す。

表1　TWU 学生の日本語ボランティア参加人数

	1年	2年	3年	4年	卒業生	計
1999年			2			2
2000年	5		2			7
2001年		4	2		1	7
2002年			5	2		7
2003年				2	2	4
計	5	4	11	4	3	27

注：学年は当時の在籍学年を指す（単位：人）
2003年は1学期のみ実績

3.　事例分析

3つの事例を検討する。3例とも、本人とのインタビューを通して得た情報、および参加期間中に筆者が得ていた口頭による情報、レポートなどを元にまとめた。

3.1　日本語教師を職業として選ばなかった学生A

学生Aは2001年から2年にわたり、日本語ボランティアとして参加した。日本語教師養成コースを2003年度に修了する予定である。

1)　参加の動機

日本語教師養成コースを受講していたことから、日本語教育の現場を見てみたいと自然に考えるようなった。授業中に筆者が行った日本語ボランティア募集をきっかけに、参加することとした。それまで経験した外国人と交流は、授業で行った限られた時間だけの交流のみであった。

2)　参加の効果・影響について

外国人に接するのに慣れた

外国人に接するのに慣れたことを学生Aは効果として強調している。それによって、学生Aは日常生活の中でも、外国人を見ると、必要に応じて自然に話ができるようになった、と述べている。

他の文化・言語への興味が沸いた

留学生のとの交流、特に韓国人留学生との交流をきっかけに、韓国語の学習を始めた。さらに、大学の制度を利用して韓国への短期留学に参加した。本人は、韓国人留学生に知り合いがいたことで、韓国語の学習の動機も高く維持出来たことを認めている。

日本語教師の仕事の内容が理解出来た

日本語教師養成コースを履修し、知識として日本語教師の仕事を何となく理解していたつもりであったが、複数の日本語教師の授業を見ることによって、教師による差、学習者との接し方や学習者との関係の作り方、授業の運営などを学ぶことができた。また、参加した授業の教員と学習者に関してのやりとりを通して、自分で勝手に判断して学習者に説明していた内容などを反省することもできた。一方、自身の適性についても冷静に考えられ、自分の将来の仕事として日本語教師をどう考えるかについての材料が集められたように感じている。

3)　自身の将来との関係

学生Ａは、ボランティアを始めた当初は日本語教師を職業として強く意識していた。しかし、日本語ボランティアを続けるに従って、また自身が韓国語学習をすすめていく中で、語学学習に関わることの難しさを感じるように変化したと話している。

学習者に関わることは、楽しく、やりがいのある仕事であることは理解できたが、一方で、留学生センターのようなところで仕事をするために教師に要求される条件など、外的なことにも目を向け、情報を得ることができた。

他の要因も考えられるであろうが、主として、日本語教師として経済的に自立するのが難しそうであること、外国人に関わることが好きなことと、教えるのが上手である、ということには大きな隔たりがあると確認できたことから、卒業後すぐに日本語教師になるのを断念した。

ただ、日本語ボランティアの活動を通して、自分自身が外国人とのコミュニケーションが日本語で取れるようになったことは、自身の成果として肯定的に考えている。

4)　検　討

日本語教師の予備的な段階として、日本語ボランティアの活動をとらえることは一般的な見方であると考えられる。しかし、学生Ａのように、日本語ボランティアの活動を通して、日本語教師という職業を冷静に見つめ、自分の進路との関係を判断するきっかけが得られたという例は、日本語教師養成に大きな示唆を含んでいる。

教師養成に関わっていると、日本語教師になりたい学生をどうやって日本語教師の道筋に乗せるか、という方向と、まったく逆の、適性がないであろうと思われる学生をどうやって

指導するか、という2つの方向のみを考えがちになる。しかし、教師養成を受けている学生自身に、日本語ボランティアという具体的な活動を通して、考える材料を与え、本人に判断を委ねる、という選択があり得るということは筆者にとっては大きな収穫となった。

3.2 日本語教師を職業として選んだ学生B

学生Bは2001年から2年半にわたり、日本語ボランティアとして参加した。日本語教師養成コースを2002年度に修了し、現在は日本語学校で非常勤講師として働いている。

1) 参加の動機

学生Bは日本語教師になりたいという希望を持って、TWUに2001年度に編入学してきた。2年間という短い期間を有益に過ごすため、TWU内での日本語ボランティア募集にも積極的に応募した。編入した時点で、外国人との接し方や日本語教師については、ある程度のイメージを持っていた。

2) 参加の効果・影響について

外国人と接するのに慣れた

日本語ボランティアに参加する以前から、海外旅行も経験し、外国人のイメージは持っていたつもりであったが、個人的に授業の中で外国人留学生に接するのは旅行とは随分違うものであることがすぐに感じられた、と学生Bは述べている。性格的にも、初めて会った人と打ち解けやすいことは自覚していたが、それが外国人留学生にも通用したことは大きな発見であったとも話していた。

留学生センターは東アジアの留学生が多いものの、欧米やアフリカなどからも留学生が集まってきており、さまざまな文化を持つ学生と直接話ができることが、学生B自身に非常に有意義であるとも思えたので、2年半も継続出来た、と感じている。

日本語教師の仕事の内容が観察出来た

複数の教員の授業に参加したことで、教員によって同じコースでも異なる部分があるのを見て、授業に教員の個性が表れることを理解した。また、日本語ボランティアを続けることによって、教員との円滑なコミュニケーションができるようになった。さらに、初めて日本語ボランティアに参加した学生には任せられないような手伝い（評価対象になるロールプレイの会話相手など）ができるようになり、学生Bにとって自信となっていった。

授業は同じ内容でも学期によって少しずつ変化しており、教員も進め方や練習内容に問題があると反省があるような授業もあった。いわば失敗例を見ることができたのも参考になったと話している。

話を続けることの難しさを実感できた

会話の練習の際、練習内容が指示されていても、まったくそれに反応できないような留学生もいた。そのような留学生に対しても、日本語を練習してもらうために来ているのだ、という意識を持って、発話を促すように、また硬い表情をしないように、と学生B自身が工夫するようになった。

日本語ボランティアがいることを肯定的に考えている留学生が圧倒的に多いことは知っているものの、それでも日本語ボランティアの存在を疎ましく考えているのではないか、と思われるような留学生もいた。授業の中で、留学生とよい関係をグループ内で作っていくことの難しさを実感できた。留学生間の日本語力の違いや、性格の違いにも徐々に目を向けることができるようになった。

3)　自分の将来との関係

学生Bは日本語ボランティア活動開始時点から、日本語教師を職業として強く意識していた。日本語ボランティアに参加中もその意思は揺らぐことがなく、学習者や教師についての具体的な情報を得ながら、自分はどのような日本語教師になりたいのか、考えることができた。

現在は日本語学校の非常勤講師として働いているが、その面接の際にも日本語ボランティアに参加したことを、自身の経験として話すことができた、と話していた。

4)　検　討

言うまでもなく、日本語ボランティアに参加することは、日本語教師を目指す学生にとっては大きな経験となる。学生Bの事例は、そのことを改めて示してくれていると考える。学生Aの場合と異なり、学生Bは日本語ボランティアの活動を通して、日本語教育への理解を深め、卒業後そのまま日本語教師としての活動をスタートさせた。日本語学校においては、採用にあたって、民間の日本語教師養成コース出身者を重視している傾向が見受けられるが、学生Bのように、日本語ボランティアに参加したことを、日本語教育に関わったという一つの大きな経験としてアピールすることも可能であると考える。

日本語教師を目指している日本語ボランティアがクラスに入ることは、日本語ボランティアにとっては、その日本語クラスの教師を一人の日本語教師の先輩として観察し、影響を受けることが可能となる。一方で、教師にとっては、学習者以外の第三者に観察されることで日本語クラスを見直すことができ、双方にとってよい効果が上がることも期待出来ると考える。

3.3 職業として日本語教師をまったく意識していない学生C

学生Cは2001年度にTWUに編入し、2002年度に卒業した社会人学生である。社会人としての経験を30年ほど持っている。現在はTWUの科目等履修生[5]である。

1) 参加の動機

学生Cは、十分に社会経験を積んだ後に、学生に復帰した。TWUに編入すること自体、学生Cにとっては、大きな転機であり経験であった。編入当初から、日本語ボランティアのことは知っていたが、学業との両立が困難と考え、卒業後に活動に参加するようになった。日本語教師養成コースは履修せず、日本語ボランティアに参加するための条件となっている「日本語教育概論」のみを履修した。

TWUに在籍する留学生との交流から、日々日本語や、日本での生活に努力を続けている留学生に関心を持つようになり、TWUの留学生や日本語力がまだ十分ではない留学生がどうやって日本で生活をしているのか知りたいと考えるようになった。

2) 参加の効果・影響について

留学生への関心を増す

学生Cは日本語力に問題があっても、日本語を学ぼう、日本で専門を学ぼうとしている留学生に感心し、基本的に応援したいという気持ちをより強く持つようになった。留学生の出身国の様子や状況を知りたいと思う一方で、学生Cができることなら何でも手伝いたいという、ボランティアの持つ本来の機能を果たそうと考えている。

自身の生涯学習として

学生Cは編入学することで広がった自身の知識や経験への欲求を、さらに生涯学習を続けたいという方向に位置づけなおした。TWUでは日本語教育ではない分野を中心に学んでいたが、留学生に関わることが好きな自分を発見し、留学生に関わることで自分への刺激を与え続けたいと願っている。

自分とは異なる世代、文化を持つ人たちとの交流をし続けることが学生Cにとっては、大きな意義を持っている。本人も「生涯学習」ということばを使い、考えを説明していた。

3) 自分の将来との関係

学生Cは、将来日本語教師を職業として選択する可能性は非常に低い。しばらくは、年単位で日本語ボランティアに参加したい、という希望を持っている。

4) 検　討

学生Cは、日本語ボランティアに参加している人材の中ではユニークな存在である。けれ

ども筆者は、学生Cが日本語クラスに参加することにより、日本語クラスに今までにない広がりを出てきたように感じている。留学生は、他の日本語ボランティアには「友達」や「先輩」的な共感を覚えていると考えられるが、学生Cには、「母親」的な好意を持っていると見受けられる。留学生は、自分たちの世話をする存在として教師を見ている場合があるが、世話をする存在が別にもいることで、教師との距離感が出てきた。この距離感は、よい意味で教師にとって学習者をより客観的に観察する余裕をもたらしているように思える。

留学生からの刺激の効果を学生C自身も認めているが、逆に学生Cが日本語ボランティアに参加し努力していることが、留学生にも大いに刺激を与えている。

この事例から、日本語ボランティアを学生と限定する必要がないことがわかる。

4. まとめ

3つの事例を検討した結果をまとめると、次のようになる。

・日本語ボランティアの活動は、日本語教師養成コースの受講生に、日本語教師と教育の現場を体験させるという大きな意義を持つ。
・日本語教師を具体的に見せることで、教師を職業として考える際の材料を与えることができ、本人の判断材料となることが期待出来る。
・幅広い層の日本語ボランティアがいることが、日本語クラスにおいて双方向の効果があると考えられる。

今回の結果の中で特に注目したいのは、さまざまな経験と情報を得た結果、日本語教師という職業を選択しなかった事例である。日本語教師を選択するかどうかは学生自身の問題であるが、そのための必要な材料を提供することは、日本語教師養成担当にとって重要な役割だと考えられる。

留学生センターの日本語教育を活性化するためにも、日本語教師養成をより具体的に、実践的にするためにも、日本語ボランティア活動の活用は今後も重要な問題として考えられるべきである。この活動をコーディネートする側は、日本語学習者だけでなく日本語ボランティアも指導するような心構えも必要であろう。

今回は、限られた事例の検討となった。他の専門を持っている学生や大学院生の検討、あるいはアンケート調査などを利用した量的な分析を今後は行っていきたい。

注

(1) TWU は 1996 年（平成 8 年）に開学した大学で、筑波大学留学生センターからは 2 キロほどの距離にある単科女子大学である。

(2) 日本語教師養成コースは 30 単位の日本語教育関連科目を持ち、日本語教師資格を得られるコース構成になっている。

(3) 学期末に行っている授業アンケートの結果を見ると、日本語ボランティアの存在を肯定的に考えている学習者がほとんどであった。

(4) 複数の教員で協議し、留学生センターで授業に参加している留学生の日本語レベルをはるかに超えている、という判断から、日本語ボランティアとして参加してもらった。

(5) 科目等履修生は、一定の手続きを経て大学に登録を行い、申請した科目を受講し、単位を得ることができる。

参考文献

赤堀由紀子(2001)「日本語クラスにおけるティーチング・アシスタントの活用ー学内日本語教員養成コースと留学生日本語クラスの連携の試み」『京都橘女子大学外国語教育研究センター紀要』第 9 号　京都橘女子大学外国語教育研究センター

赤堀由紀子(2002)「ティーチング・アシスタントプログラム充実のための事前指導に関する一考察—ティーチング・アシスタントの教師成長を支援するために—」『京都橘女子大学外国語教育研究センター紀要』第 10 号　京都橘女子大学外国語教育研究センター

横溝紳一郎(2003)　「大学日本語教員養成過程における実践能力の養成と「教育実習」のあり方を巡って」大学日本語教員養成課程研究協議会 24 回大会・シンポジウム資料